



(アルメニヤの子供の汽車)

## ソ連の就学前の教育をみて

長 田 新

ソ連の教育は日本と違つて、原則的に揺籃期から始まる。托児所は母が欲しさえすれば——ひよつとすると誤

解されるように強制的ではない——その子を入れて、いとも科学的な指導を受けさせる。托児所の目的は、男子と平等に認められるこの国の女子の働らく権利と義務とを保証するところにあることはいうまでもない。だが吾々からいえば人の一生のうちで幼児期こそ、言葉の最も厳密な意味で人間教育の可能な且又最も有効な時期であるという意味で、吾々はベスタロッチャー、フレーベルと共に、ソ連の就学前の教育のもつ意義を高く評価せずにはお

れまい。このようにしてソ連ではあらゆる種類の企業団が働く婦人のために托児所を設置しなくてはならない。事官アパートも、労働組合も、農場も、協同組合も托児所を設置している。若し或る地域組会で婦人が托児所を欲しくても、その責任を執行する組織がなければ、厚生省が援助して作らせる。托児所で子供を預かる時間は働らく母の都合で午前七時半から午後七時半までの場合もあるし、土曜日の午後から月曜日の朝までを除いて一週間子供を托すこともある。ただソ連の母は時には夜通し子供を手離さなくてはならないから、托児所は二十四時間開かれている。だが幼児をもつ母が余り長く夜業することはない。勿論托児所の職員は母親に代つて愛情こめて、優しく子供を養育することがソ連では重要視されている。けれどもソ連の当局は余り長く親から子供を

離しておくことは避けている。何故かといえば当局は托児所を家庭の代用とは考えていないから。托児所の子供は三時間半毎に母が来て母乳を飲ませることもあるが、全食事を托児所で与える組織になっている。しかもその職立は専属の医師の研究によるからひどく栄養的で、従って幼児の発育は実によい。食事は無償ではないが、しかし徴集する額は極めて少額である。しかも二人以上の子供をもつ家庭は免除される。

托児所の職員には専任の所長があるが、彼は例えば大学で学齢以前の教育に従事するものための特殊な学部を卒業したものである。時には医者資格をもった者もいる。この所長の外に専属の医師、十五人の子供につき一人の保姆と助手とがおる。また子供の数にもよるが、二人乃至三人の保健婦と、二人乃至それ以上の教師がおる。家事職員は料理や清掃をする。保姆と教師との勤務時間は六時間。家事職員の勤務時間は七時間。行事その他でそれが延びれば正式に手当がつく。子供の生活と教育を立派にやるために医学的・教育的並びに家庭的の職員全部の会合を集めて聞くと、これはよいことである。

前にもいったようにソ連の托児所はソ連の当局が単に働く母親の便宜のためではなくて、ソ連の教育体系に属している。托児所はまた母親教育のセンターとしても役立ち、母親と托児所職員との懇談、托児所教員の家庭訪問は勿論、児童の保護と教育とのため

に講演会を開催する。托児所ではひどく幼い子供に対しても或る種の教育が行われる。生後四カ月の幼児にも色々な運動をさせ、十八カ月になるとしつけもする。音楽や簡単なリズムの教育はソ連では托児所から始まる。ソ連の子供はまた托児所で集団生活の最初の経験をする。だから一つの大きな机を囲んで三人乃至四人の子供は仲よくする。こうして子供は食べる時も遊ぶ時も孤独ではなくて集団的である。玩具も二人以上の子供が一緒に使うように組んである。遊び場は十二人かそれともそれ以上の子供のために作られており、玩具や設備も集団活動のために計画されている。比較的年上の子供の集団では、幼稚園と同様構成的な提案として建築のための積木、耕すための庭園、図画手工のための設備がしてある。

托児所の子供は三才になると幼稚園に移ってゆく。この移ってゆく時、子供の発達状況に応じて最善の注意と努力とを払っている。新たに子供を入園させるには二日乃至五日かけて一步一步と移ってゆかせる。この時教師はすべての子供に個人的の注意をし、入園する子供は愛情のこもった温かい歓迎を受け、幼稚園が幸福で楽しいところであるというように感じさせる。そのため托児所の教師は子供をつれて二日も三日も幼稚園にゆく。のみならず幼稚園の教師は子供が入園する前に家庭を訪問して子供に会っているといふと話すのである。日本の場合と比較して至れり尽せり

ではないか。

ソ連の幼稚園令第一条によると、幼稚園は「全面的発達と教育とを子供に与える目的で、三才から七才までの幼児を養育するソ連の国家施設である。同時に幼稚園は工業的・文化的・社会的・政治的の国家を法に対する婦人の参加を促進する。ソ連の幼稚園は各共和国の教育省の管轄で、地方教育当局によって直接統制されている。托児所と同様に幼稚園も一定の集団によって設置されたり、工業的・管理的の企業体によって婦人労働者のために設置されている。親の支払う謝礼が食事の代償を補うようにしてある。しかし子供の多い親はそれさえ免除されている。普通の幼稚園は二十五人定員の三乃至四つの組から成り三七名組は同年令である。最低年令三才から三才、中間は四才から五才、最高は六才から七才である。各組は専門的教養のある教師と助手と二人で担当する。どの幼稚園をみても、教育的の施設が完全であるだけではなくて、情操教育のために裝飾に意を用い、様々の草や木や愛玩動物が園内に用意してある。昼寝のための設備は勿論、サナトリウムもあり、特別の音楽室には専門の音楽家がいる。健康の増進が幼稚園の重要な仕事であるから、日光浴のための設備と清潔な浴室とがある。子供は働く親の仕事との関係で、幼稚園で九時間・十時間乃至十一時間を送る。九時間、十時間が普通である。親が夜勤の場合は子供が泊る特別室ができていて、子供は幼稚園で

三度食事をとるが、泊る子供は四度とる。健康教育は最も重要である。従って栄養に富む。食物と運動と衛生的の正しい習慣をつけることがこの年令には特に大切である。子供はひどい雨や風でない限り、また気温が零下一〇度以上でない限り、四時間乃至五時間戸外で過すことになっている。

日課は年令によって違うが、四才から五才までの組は大体次の如くである。

八時―宿泊の子供の起床

八時―九時―昼の子供の登校・身体検査・自由な遊びやその他の活動・体操

九時三十分―指導による諸活動

十一時三十分―遠足・戸外遊技

一時―昼食

一時三十分―三時昼寝

三時―四時―自由遊技及び諸活動

四時―午後の軽い食事

四時三十分―散歩・戸外遊戯・昼の子供の帰宅

七時―夕食

八時―宿泊の子供の就床

こうして子供は毎日理想的の生活をし、理想的の教育を受けている。第一朝登校すると子供は先ず医者から診察して貰えてそれ

から日課に入るのだから王子様でもむつかしからう。因みに日本の幼稚園は午前十時から正午までで、正午になると家から持参した弁当を食べて帰宅する。だから子供は家を出たかと思つと、もう直ぐ帰ってくる。教育内容の如何に貧弱なことか。

いうまでもなく幼児期においては種々な形式の遊戯が教育の一切であるといつてもいい。そしてそれが単に体育だけではなくて、科学的な道德的な、芸術的な、教育の意味をもっている。真善美の教育の意味をもっている。遊戯は子供の想像力と個性とを発達させ、社会集団の中で如何に生活すべきかを子供に教える。遊戯乃至指導された諸活動は、唱歌、ダンス、集団ゲーム、図画、工作等々を含んでいる。自由時間は人形その他の玩具で遊ぶ時間だが、どんなものを撰ぶかは子供の自由である。強いてはいけない。指導活動の中で最も大事なものの一つは言葉遊びであるが、ここでは会話の能力を発達させ、語彙を豊かにするように多大の注意が払われている。

ここで見落してならないことは、ソ連の幼稚園が子供の全く自由な遊戯によって教育していることである。これを日本の幼稚園のように恰も小学校の予備校として、小学教育の模写物乃至複製品のような非教育的の教育をして、いるのとは天地の相違がある。ルソーの言葉でいえば、日本の幼稚園は「教える教育」をすることによって非教育的な幼稚園であるのに、ソ連の幼稚園は

「教えぬ教育」をすることによって教育的な幼稚園である。一言にいつてソ連の幼稚園は最も教育的な幼稚園である。日本の幼稚園は最も非教育的な幼稚園である。私は一人のフレイベル学者として幼稚園のもつ教育的意義を強調する点において世に稀れな一人の教育学者であることを自任しているにも拘らず、五人の吾が子を一人も幼稚園に入れなかつた。それは日本の幼稚園が「教える教育」をするからである。しかしそういう私もソ連のような幼稚園なら五人の子供を入れたであらう。私は日本の幼稚園のような教える幼稚園は、害あつて全く益なきものと信じて疑わない。

私はルソーが『エミール』の中で説く「教えぬ教育」こそ言葉の最も厳密な意味で幼稚園の教育でなくてはならないと思つ。因みにルソーも『エミール』の中で、私と同様に幼児のもつ教育の重要性を筆を極めて強調している。しかも彼が若し今の日本の幼稚園をみたら恐らく私と同様にこれこそ世界で一番非教育的の幼稚園であるというであらう。

ソ連の幼稚園にいつてみると、一流の童話作家や童謡詩人がやつてきて、自分の作った作品を子供に話して聞かせたり、読んで聞かせたりする。幼き読者、幼き聞き手の率直な批評が、この国の子供本位の教育的な作品を作ることはいうまでもない。ソ連の幼稚園で子供の時間の大部分が自習の中で経過されるのも教育的である。これを教室という名の狭い牢屋の中につれこまればちな

日本の子供に較べたら天地の差がある。ソ連の幼稚園で子供が周囲の世界乃至移りゆく季節や草や木や動物などについて、教師に強いられずに自ら観察し自ら報告するあの光景は、今も私の眼前にちらちらする。最上級の子供は勿論三つのアールの基礎となる初歩的な経験をつむが、それがまたいとも自然的である。子供は算えたり、測ったり、時間をいったりすることを学びわするが、しかしそれが飽くまでも自然的である。読みも読みとしては教えない。時期の早きに失する読み方が子供の意気を沮喪させる如何に非教育的なものをソ連の教師はよく知っている。一言にいって形式的な課業はソ連の教師の恐れ慎しむところである。勿論この国にも吾が子の早教育を望む愚かな親は日本ほどではないが、少しは居るらしい。ボゾイチは雑誌「家庭と学校」の最近号でそういう愚かな親を戒しめて、こう書いている。

「多くの親は五才の子供が大人のように読み書き、教えることの学習に対する興味（この年令では普通はまだない興味）を示すと自慢する。だがこの頃このような速度を出すのは、子供の全体としてのパースナリティーの調和的発達と全能力の円満な発達とを破滅する。」

ソ連の教育者は集団の献身的な一員となるために子供は全面的に発達した人間にならなくてはならないと信じている。全能力の円満な発達というのは、周知の如く産業革命に媒介されて発展し

てきた今日の資本主義社会は、分業の進展に伴って、レーニンもいっているように「専門の白痴」時代になった。全能力の円満な発達を意図する教育は、その「専門の白痴」から人間を解放しようとするのである。というのは人間の解放を目指す立場に立つ限り、人間の自己阻外に外ならない「専門の白痴」から、資本主義下の人類を解放する一つの道は、人間が本来もっているあらゆる性能を全体として、円満に発達させるためにあるのはいうまでもない。それが頭と手と心臓との調和乃至均衡を教育の目的として説いたベスタロッチーの教育理想と一致していることは、ソ連のベスタロッチー学者ローテンベルグ乃至はレーニン夫人クルスカヤが「教育と民主主義」の中で説く如くである。しかしソ連において全能力の円満な発達が欠くことのできない条件だからである。ここにはプラグマティズムの陥る「手から口へ」の教育のもつ欠陥への深い反省もみられる。ソ連の教育がプラグマティズムを排除して新ヒューマニズムの上に立つのもここからきている。

ソ連の幼稚園は、また集団生活に大きな意味と価値とを認めている。個人主義乃至自由主義ではなくて、社会主義がこの国の教育の基礎原理であることはいうまでもない。だからソ連では幼稚園そのものが「児童集団」と呼ばれ、子供が温い友情と協同心とで、共に学び共に遊ぶことに最大の強調符が打たれている。だが集団とは単一な、同じような子供たちの機械的な団体ではなく

て、すべての子供がそれぞれの興味と欲求とをもって、欠くことのできない条件である。周知の如く個性の尊重はソ連教育の一大眼目である。このようにして子供の個性乃至子供の諸々の欲求は、子供と温かい人間的な関係を持ち、且又子供をよく知つてゐる教師によつて十分にはたされてゐる。ソ連で教師の教育精神がひどく強調される理由はここにある。ソ連の幼稚園で、子供が入学して卒業するまで同一の教師に担当されるのはここからきている。一組二十五人を定員とし、各教師に助手をつけておくのも、子供の個性尊重のためである。いうまでもなくソ連の幼稚園は日本のそれのように一日二時間そこそこではなくて、前にもいったように、一日の大部分を幼稚園で過ごし、時には宿泊することさえある。だから教師と子供との個人的なつながりは十分できる。

一面においてかくも個人的、個性的の配慮をするソ連の教育は、他面において前にもいったように、集団社会のための教育を強調する。個人の自主性と社会の連帯性との調和統一、これがソ連教育の根本である。このようにして子供は自然の障害を突破して進む英雄的な社会主義的建設の美談を聞き、建設的な労働のあらゆる分野における国の指導者を尊敬することを教えられる。ここには一見アメリカのフロンティアの精神とよく似たところがあるが、吾々はアメリカのフロンティアの精神が個人主義、自

由主義、乃至資本主義の道をゆくのに對して、ソ連の開拓的建設的精神はそれとは全く違つて、飽くまでも社会的国家的であることを見落してはならない。このようにしてソ連の子供は幼稚園時代から社会に有用な労働の習慣と器用さとを身につける。机を整頓したり、食事の手伝いをしたり、庭の草や木に水をやったり、兎や亀に餌をやったり、部屋の片づけや掃除をしたりするのにも皆なこの教育精神からきている。

ソ連では幼稚園の職員は、教育省によつて選ばれ、この特殊な地位のために特殊な教育を受けた園長と、子供の発達に通じている小児科医と、音楽教師と料理人と家事職員とから成つてゐる。飲食その他健康に關することは小児科医の五〇パーセントは女医で、くは彼女の——といふのはソ連の医師の五〇パーセントは女医である——意見は時間割や休息の問題では決定的である。随時開かれる教育的、医学的、家庭的各職員の間合は、彼等相互の理解を深め、子供の全生活を身体的にも精神的にも教育的にするのに大きな役割を果している。更に親の教育はソ連の幼稚園の重要事項の一つである。各組から一人または二人の親がでて組織している父兄委員会は、幼稚園の実際の仕事に参加する。彼等が諸会合の計画に協力し、建物の修繕や裝飾のための父兄の援助を配慮し、運動場に草や木を植え、遠足の準備をするのは必ずしも珍らしいことではないが、ソ連の父兄は教室で手工や遊戯にまで協力して

いる。ソ連の父兄は一般に幼稚園を訪問することが多い。それは一つは幼稚園当局の奨励にもよるが、一つは労働時間が合理化され、更には生活に余裕があるからである。勿論家庭状況を知るために、ソ連の教師は家庭訪問に十分な時間を費す。これも日本と違ってソ連では教師の時間に余裕があるからである。尚見落してならないことは児童保護当局もいっているように、「進歩的なソ連の親はしばしば学校当局に対して価値ある助言と援助とを与えらる」ことである。ソ連の多くの幼稚園は「父兄の部屋」をもっているが、そこには親や子供のための書籍の一覧表や、適当な衣類の見本や、食事や健康に関するパンフレット等が展示され、更に図画工作その他の子供の作品が陳列してある。その至れり尽せりの状況は到底吾が日本の幼稚園の及ぶところではない。

尚、ソ連では夏の暑い期間、都市の幼稚園と托児所とは田舎に移動し、或いはコルホーズ（集団農場）で農業に親しませ、或は自然に浸って経験内容を豊富にさせる。吾が日本の幼稚園が長い夏休みを文字通り休みにして、教育は一歩前進半歩後退とでもいった非教育的の態度とは大きな相違がある。

ソ連では戦時中、正確にいえば一九四三年、右に述ぶるが如き科学的で教育的な幼稚園に在籍している子供の数が百三十四万いた。それが戦後五カ年計画で五百万になった。これを日本のたつ

た十二万に較べたら天地の差があるといっている。実際日本の人口八千万、ソ連の人口二億なるを思えばこの差は余りにも大きい。「日本、道遠し！」と嘆かずにはおれないものは恐らく私人ではないだろう。

私は最後に一言する。既にみてきたようにソ連では托児所は一寸から三才まで、幼稚園は三才から七才までとなっている。ところが日本では托児所——保育所と幼稚園とが並行して、保育所には貧乏人の子供がはいり、幼稚園には金持ちの子供がはいる。だから制度的にも前者は厚生省が管理し、後者は文部省が管理する。しかも両省の小役人の縄張り争い——これが昔から日本の小役人の常習犯だが——が現地の父兄や教師を悩ましているのもさることながら、貧富の差によって、子供の入って学ぶ学校を異にすることは何としても見落せない。いたいけな子供の時から貧乏人の子供のゆく学校と金持ちのゆく子供の学校とを二つに分けることは、三つ子の魂——それは百まで続くという——に階級意識と階級対立と階級闘争との元を作る。これでは今日の日本の政治家と行政官とは革命の基礎工作をしているようなものだ。その無知、恐るべしといっている。